

# 人類学者。ピウスツキ夫妻描く

## 小樽の花崎泉平さんが長編詩

小樽在住の哲学者で詩人の花崎泉平さんが、長編物語詩「ユサンマとピウスツキとトミの物語」他（未知谷、2160円）を刊行した。長編詩は、小松秀雄賞受賞作の「アイヌモシリの風」に吹かれて以来、8年ぶり。「（譯者注）読んできた人にゆだねたいが、とても良いテーマの長編詩、面白く試みになったと思う」と話している。（久才秀樹）

「小熊賞の後は、長編詩を、というが、アイヌ民族について書く気持ちにならなかった」と話された。ついに発表された。



「アイヌの人々と友人として付き合ったピウスツキの風情を、考え方に共感した」と話す花崎泉平さん

れ、再び書き始めた。土橋芳美さん、札幌と長屋のり子さん（小樽）の2人の詩人の作品だ。土橋さんの叙事詩「アミのペンリウク」因わりのアイヌ人書「は、北大にある先祖の遺骨返還を求めた経緯をつづり、昨年の北海道新聞文学賞（詩部門）の佳作を受賞。長屋さんの朗唱詩「聞いたシンキチヨウの悲歌」は、樺太アイヌの女性シンキチヨウ（ユサンマの別称）を取り上げ、昨年春に江別の劇場で披露された。「2人の詩から」テーマが見つかった。ユサンマに興味を引かれ、ぜひとも書きたいと思ったと振り返る。

ユサンマは、サハリンに流刑されたボラランドの文化人類学者、プロニスワフ・ピウスツキ（1866～1918年）と出会い、結婚。子どもも授かるが、ピウスツキとは離れ離れになってしまう。

## アイヌ民族にまつわる詩から触発

長編詩では、ユサンマ、ピウスツキのそれぞれの立場から物語が語られる。

長編詩のもう一人の主人公は、花崎さんが一線に暮らしながらアイヌ女性のトミさん。前作の「アイヌモシリの風」にも登場するが、今回は、トミさんの眠るオホツク海の町への移参など、より踏み込んで描いた。トミさんの愛情がにじみ出た詩にもなっている。「生前は自分のことを書かれるのをとても嫌がっていた。でも、私も年を取ったし、追憶的な意味も込めて書いた」と明かす。

今年6月で87歳となる花崎さんだが、10月にはボラランドを訪れ、ピウスツキの没後100年を記念した行事に参加する。また、ベトナム戦争時に札幌へ平運（ベトナム人に平和を市民連合）を立ち上げたり、伊達火力発電所の反対運動に関わってきた自身の経験や考え方をまとめた原稿を執筆中という。「これまで自分の活動を記し、精神史的な一冊になればと思う。今の若い人には、もっと自由に自分の意見を言っていんだよねと伝えたい」と話している。